

2020年12月6日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「平和の王」イザヤ書11章1～5節、詩編72編1～4、12～14節

主任牧師 加藤 誠

**「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊。彼は主を畏れ敬う霊に満たされる」(イザヤ11章1-3節 a)。**

アドヴェント(待降節)の二本目のローソク、「平和の灯」に火が灯されました。太陽が明るい昼間にはローソク一本の灯りにはほとんど意味がないように思われますが、夜のとぼりが降りてあたりが真っ暗になると、たった一本のローソクが照らし出す明かりがどれほどありがたいかを知らされます。

昔の話ですが、ある青年が人生の問題に悩んで大学の哲学の教授の家を訪ねたそうです。教授は何時間もかけて哲学の話をしてくれたのですが、彼の悩みは解けず、帰ろうとすると外はとっぷりと暮れて真っ暗でした。教授は「小さな懐中電灯だけれど、あるとないとでは違うから持って行きなさい」と懐中電灯を貸してくれました。それを受け取って夜道を歩き出した時、青年はハッと気づいたというのです。「光が必要なのだ。たとえ懐中電灯一つ、小さな光でも、自分の足元を照らしてくれる光が必要なのだ」と。

イエス・キリストは言われました。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(ヨハネ8・12)。今も昔も、悲しみ、憤り、不安や嘆きに覆われた人間の世界を、真実と優しさと勇気の灯で照らし出すために、イエス・キリストは来て下さいました。その光は決して大掛かりな光ではなく、ローソクの灯のように小さく控えめな光ですが、神のもとにある愛と希望を届けてくれる確かな光です。「あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らし出す灯」(詩編119・105)。神の御言葉であるイエス・キリストは、私たちの歩む道を照らし出し、私たちが「神の命」、「神の平和」に向かうためには次の一歩をどちらに踏み出したらよいかを確かに指し示してくれる光なのです。

今朝、ご一緒に読んだイザヤ11章は、クリスマスによく読まれる預言の一つです。「エッサイの株」とはダビデ王の家系を意味します。ダビデ王の子孫からすべての人を正義と真実をもって裁く「平和の王」が生まれる。その王は「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」で満たされ、弱い人、貧しい人のために正当で公平な裁きを行う方だと、イザヤは預言しました。

旧約聖書を読んでいると、このような「平和の王」の登場を人びとが繰り返し切望してきたことが伝わってきます。なぜなら、神を畏れようとせず、私利私欲に走る王たちの不正義がまかり通り、圧倒的に多くの人びとは貧しさの中に捨て置かれていたからです。当時の社会は、王と貴族たちが1-2%、その支配を支える役人たちが4-5%、中産層がまったくいなくて、あとの93-95%は、重い税を搾

取され、兵士として駆り出される苦しみにあえいでいた貧しい農民たちだったそうです。しかし、神はそのような不正義がまかり通る支配搾取構造を決して喜ばれず、貧しい人、弱い立場の人、その一人ひとりの血が尊いものとして扱われて、正当な裁きと公平な弁護がされることを望まれていることを詩編は語りました。そして神は、そのような「神の平和」を実現する、主の霊に満たされた「平和の王」を必ず送ってくださるとイザヤは預言したのです。

今から二千年前、飼葉桶の中に貧しく生まれた赤ん坊がやがて成人し、貧しい人びとの悩みと嘆きに寄り添い、救いをあらわされた時、人びとは、このイエスこそ、イザヤが預言した「平和の王」であり、不正義あふれる現実社会を変革してくれる救世主（メシア）であると期待したのです。

しかし、主イエスは「わたしは世が与えるのとは異なる平和を与える」（ヨハネ 14・27）と、当時の権力者たちを打ち倒す革命的な道ではなく、むしろ自らを敵に引き渡し殺されていく「十字架の道」を示されたのです。

それは「不正義あふれる現実を変えなくても良い」というものではありません。私たち人間が「神の平和」に向けて根本的に変えられるためには、闘争による勝利ではなく、祈りと赦しによる勝利が必要であること。支配者をその地位から退け、社会システムを改革する以上に、私たちの心と行動が神の愛に深く砕かれ、神の赦しに深く根差したものに変わられることを祈り願われたからです。なぜなら、どんなに公平な社会システムが作り出されても、「いつも自分本位で、自分の安泰を求め、他者への愛においてはほんとうに貧しい私たちの心」が新たにされないならば「神の平和」は決して実現しないからです。

アフリカのルワンダで平和構築のための働きを 17 年間続けている佐々木和之さん、恵さんご夫妻の働きがあります。佐々木さんの出発点は飢餓で苦しむエチオピアで農業指導をすることでした。けれども農業指導によって暮らしが良くなっても、民族同士の内戦が起こるとあっという間に農地が荒らされてしまう現実を前にしたときに、平和を創り出すための学び（平和学）の必要性を知らされます。そして今から 26 年前に民族大虐殺が起こったルワンダに導かれたのです。敵対するツチとフツという二つの民族が和解と平和にいたるには、自分たち民族の正しさを絶対視し、相手の民族の間違いを糾弾し、裁くだけでは決して平和は生まれません。むしろ自分たちの過ちもきちんと認め、相手の素晴らしさを認めていく、キリストにある赦しを学んでいく関係を通してこそ、和解と平和が実現することを体験していかれたのです。

今年のコロナ禍で迎えるクリスマス。たくさんの方々が痛み、悲しんでいる世界において「平和の王」として来て下さった主イエスの深い祈りを大切に受けていくことは、誰を覚えて、何を大切にしていくことなのでしょう。「平和の灯」である主イエスが教えてくださった「神の平和」に向けて、何か新しい一歩を踏み出していくアドヴェントとなりますように。